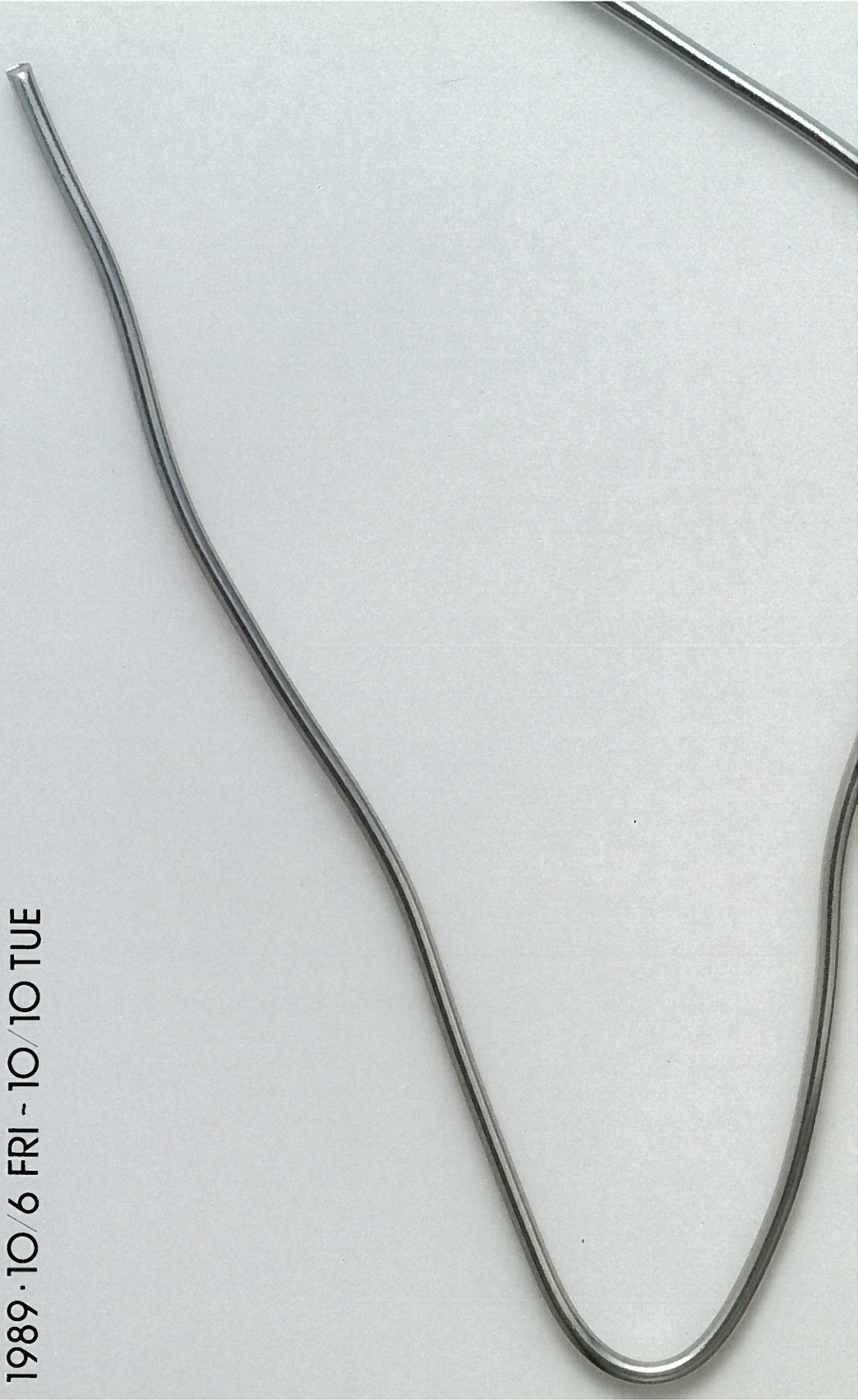


'89 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

1989 · 10/6 FRI - 10/10 TUE





ごあいさつ

技術は急激な加速度をもって進歩してきている。そして、ホームオートメーション、オフィスオートメーション、ファクトリーオートメーションなどと、あらゆる分野において合理化と自動化が進んできている。さらに、余暇が増大し、それに伴う施設も拡充され、国際交流や連携も盛んになって、「現代はまさに新しい時代への大転換期である」と言っても過言ではない。しかし、人の心はどうであろうか。心というものは物理的に処理できるものではなく、またたいへんつかみにくいものでもある。これほど恵まれた時代でありながら、一方でストレスや精神的ひずみ、落ち込みがますます増大していくのが現実である。今、さかんに「快適」「遊び」「楽しみ」というキーワードを掲げ、人々に心を大事にしよう、という気持ちが高揚してきている。このような時代に、この高岡のクラフトコンペは、技術と心を結ぶ、一つのすばらしい紐とも言える。省みれば十五年前に、「人のそばに置きたいもの」「人の心と語らえるもの」を創ろうと、金子隆亮氏をはじめ、高岡の気の合った若者たちが、クラフトの展覧会を開いた。このメッセージがスタートとなり、回を重ね、確かな基盤ができ、現在のような大きな“工芸都市高岡クラフトコンペ”の立派なイベントとなったのである。誰かが仕掛けたものではなく、若い情熱の盛り上がり、自然の姿で成長してきたのである。もちろん、その一面には市民一体の真剣な取り組みの姿勢があり、その姿勢があるからこそ、今日のような意義あるコンペが支えられている。

このイベントに多少とも関わりある者のひとりとしては、まことに喜ばしく、またこのコンペのますますの発展を祈る。

工芸都市高岡'89クラフトコンペ審査委員長
富山工業デザインセンター所長

平野拓夫



審査委員長
平野拓夫 【Takuo Hirano】
㈱平野デザイン設計



審査員
黒川雅之 【Masayuki Kurokawa】
建築家 プロダクトデザイナー



審査員
粟辻 博 【Hiroshi Awatsuji】
テキスタイルデザイナー



審査員
黒木靖夫 【Yasuo Kuroki】
ソニー㈱取締役 クリエイティブ本部長



審査員
伊藤隆道 【Takamichi Ito】
造形家



審査員
杉本貴志 【Takashi Sugimoto】
インテリアデザイナー



審査員
泉 真也 【Shinya Izumi】
環境デザイナー



審査員
清家 清 【Kiyoshi Seike】
建築家



審査員
荻野克彦 【Katsuhiko Ogino】
プロダクトデザイナー



審査員
梨谷祐夫 【Sachio Nashitani】
㈱松屋銀座本店顧問



審査員
喜多俊之 【Toshiyuki Kita】
デザイナー



審査員
山田礼子 【Reiko Yamada】
彫金家 日本ジュウリーデザイナー協会会長



CRAFT COMPETITION in TAKAOKA

入選作品一覽

グランプリ



岩館 隆

「入子ボール 赤・黒」

●材質 栃 ●寸法 16.5×16.5×10cm



伝統的な入れ子・応量器を、ツートンカラーに塗り分ける発想から見事なモダンさが生まれた。

黒と朱の色際のぼかしは丁寧に処理され、技術の確かさが示されている。また、縁の厚味、木地形状とぼかし幅とのバランスが実によく、おらかでかつ新鮮なイメージが全体にあふれている。

市制100年記念特別賞

●
株式会社リンク
「YOUシリーズ I~VI」

●材質 アルミニウム ●寸法 27×27×0.5cm



「金属素材の焼きなましすぎ」といった、通常は欠点となる要素を逆に長所として生かし発展させた点が評価される。

ごく一般的なアルミニウムという素材を、紙のように軽やかに用いており、使用時に楽しい話題が生まれるような作り手の「提案」を自然に感じさせる作品である。

金 賞

●
相川繁隆
「錐」

●材質 銅合金 ●寸法 30×30×5cm 15.5×15.5×7.5cm



円錐形というテーマを、ポジティブではなく、凹みとしてネガティブに捉えている点がキーポイントである。

「丸」というおらかさと「尖り」のシャープさ、二つの要素を同時にもつ円錐形のシンプルな新しさ。

高岡銅器の伝統的な着色技法である斑朱銅が新しい形体に蘇った。

金 賞



永井康夫

「蓋物 I・II」

●材質 麻布・漆・貝 ●寸法 14×38×8cm 18×29×8cm



乾漆手法を自らのものにし作品化した意欲が高く評価される。

時代を経た手法から、デザインオリティの高い、現代的かつインターナショナルな作品が生まれた。

この乾漆手法には堅苦しさがみられず、「漆」の方向性として開けた新しさが示されている。

銀 賞

久津輪勝男 「パーティのための木の器」

- 材 質 ラバチヨ(南米天然木)
- 寸 法 75×50×3.5cm
70×24×6cm
40×30×5.5cm

素材を熟知しているにもかかわらず、木への手技や作り手の思い入れを感じさせることなく、むしろ鋭角的に処理した明快な強さがある。

シンプルでおおらかな形に、木のよさがよく生かされており、素材、プロポーション、スケールとも整った作品である。



銀 賞

新宮克美 「月夜に……」

- 材 質 陶土
- 寸 法 15×15×4.5cm
8×7.5×1.1cm
5.5×6.5×10cm

踏鞴ツツリの仕事は、普通型を用いるため、硬い感じになりがちだが、この作品は、逆に型から解放された、しなやかな感覚が魅力となっている。

端を薄く仕上げ、軽やかで楽しく、色合いの調和もよい。





奨励賞

郡司雅人 「波の皿 たて波よこ波」

- 材 質 陶土
- 寸 法 57×30×3cm



奨励賞

田中清隆 「Paper Moon V」

- 材 質 和紙
- 寸 法 30×35×100cm

奨励賞

堀 紀幸 「Plate(銅炎II)」

- 材質 銅板
- 寸法 29×29×5cm
24×24×4cm
20×20×3cm



奨励賞

三枝しずよ 「水割りセット」

- 材質 ガラス
- 寸法 8×8×13cm
9.5×10.5×17cm
14×14×12.5cm

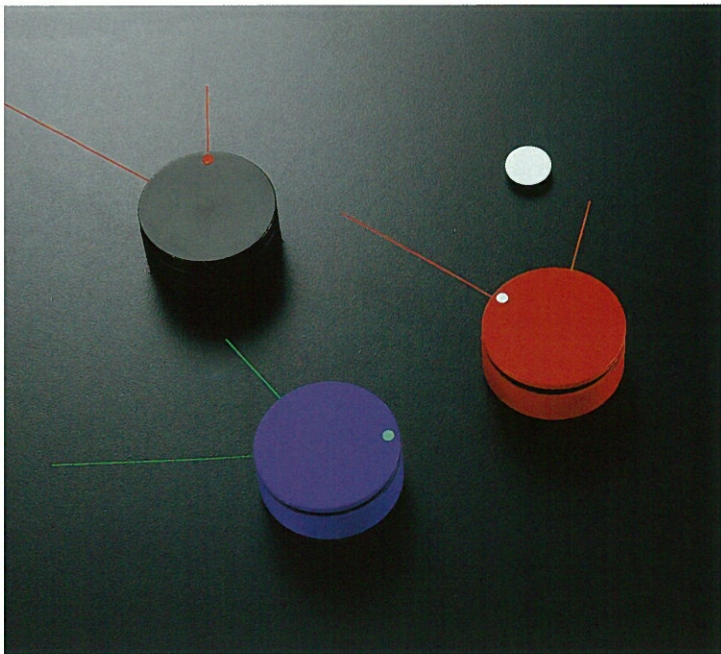




奨励賞

小野友子 「KANA」

- 材 質 銀・ステンレス・金箔
- 寸 法 20×27×1.2cm



奨励賞

奈良郁夫 「NEWSクロック NS55」

- 材 質 プラス・アルミニウム
- 寸 法 8φ×4.5cm

奨励賞

Studio Magnets 「薪ストーブ」

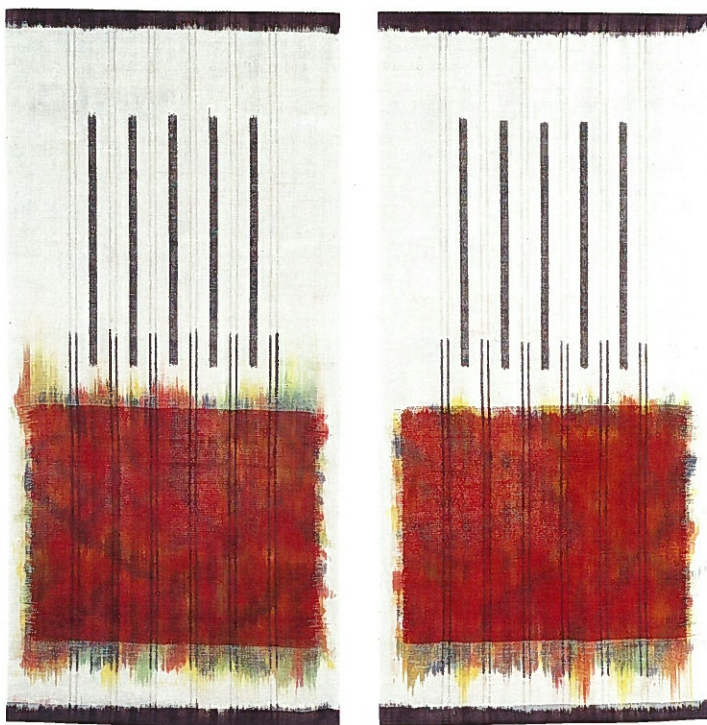
- 材 質 鉄板
- 寸 法 40×65×50cm

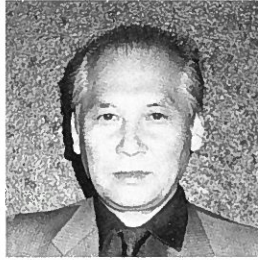


奨励賞

清水まゆみ 「KASURI LINES No.3-1」

- 材 質 麻100%
- 寸 法 84×175cm





クラフトコンペに当って

工芸都市高岡の主催で'86年に全国規模のクラフトコンペが開かれた。この企画は地方都市が独力で実施する催しとしては初めての
ことなので、関係者はその成果に一抹の不安があったようだが応募の作品審査の段階になって、その心配は全く感じられず、むしろ
全国各地より、むらなく集められた多彩な応募作品を前にして、その質・量ともに充実していて、企画の目的に充分、答えられたと安堵した
ことを思い出す。

もとよりコンペの成果は、一般企業の生産計画を通じて生まれ出る製品とは異なり、時代の大きな動き即ち感性や価値感と云ったものが
素直に表現されることに特色がある。

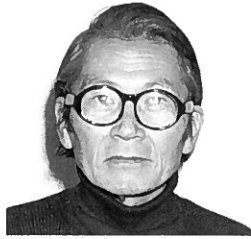
'86年度のコンペに、最優秀賞に選ばれた作品を例に取り上げると、コンペの成果が象徴されているように思う。この作品は工芸の新しい
動きを適格に把握、発想、技術、表現力などが、一般業界に流通しているものと比較し、強いキャラクターが感じられ、業界への強い
インパクトを与える内容を保持している。その他の入賞作品など、品種的に落差を感じるものは確かにあるが、無名の新人の良い質が浮
かび出てくる契機が見えたのは深く印象に残る。

日本のクラフト界は多彩で、長い伝統を持った数々の技術が今も現存し、機能している分野である。

そこで新しさを創造することは、口で云うほど簡単なものではない。そして、伝承の技術を身に付けた、若い力の挑戦によってしか開かれな
い宿命を感じる。クラフト界の将来は、腰の坐った若い人々のエネルギーを核にして展開するしかない。この企画が若い力の挑戦の
機会として、長く持続されることを心から期待した。

工芸都市高岡'86・'87クラフトコンペ審査委員長

内藤正光



「工芸都市高岡'89クラフトコンペ」開催によせて

高岡のクラフトコンペも4年目を迎えるという。このような展覧会には1つの節があるもので、思えば丁度そんな時期にきているわけで、作品の密度が定着してきているも惰性に流れやすい時期にさしかかっているとも言える。何としても活力への刺激のほしい頃だが、折よく高岡市市制100年記念イベントという願ってもない機会に恵まれたことはこのコンペの前途に彩光があてられているようにも思える。

唯、この節目をどのように切り抜け、どう生かすかが問題であって、これからの勝負でもあろう。高岡は古からの鑄造品や漆器の産地として知られてきた土地だけにこのようなコンペの主催地として最も適した条件を持っているわけで、むしろ、国際的に発展させられないものかと思ったりするのだが……。それはともかく、今後の展開はなんといっても業界の熱意と市の協力のスクラムの力に注目したくなる。

今や周知のことだが、イタリアの陶業地ファエンツァは20数年前まではクラシックな陶製品の産地として知られていたが、ここで開かれるようになったコンペでは前衛作品が大勢を占めるようになって、日本のオブジェ作家も何人かグランプリを受賞している。こうした傾向をかならずしも是とするわけではないが、世界の注目を受ける要因になっていることは事実である。イタリアはいまだに都市国家時代の残渣が見られる国だけに都市のプライドから湧き出る情熱のようなものを感じさせてくれるが、この場合、市と言っても市当局だけではなく、所謂、業界は勿論、街ぐるみといった感じがするわけで、大げさに言えば、街を愛する心の集約がこのコンペを国際的にもりあげてきたではなからうかとさえ思わせるものがある。

日本も地方都市の隆盛にもなつて都市計画、都市改造案が活発で、それにもなつていろいろな企画が実践されているが、どういふわけか先細りになってしまう場合が多いように見受けられる。最近、クラフト関係のコンペや展覧会があちこちで開かれるようになったが、いづこも同じ状態に思えてならない。個性をどのような方向に求めるかは大変むづかしい課題だが、工芸都市高岡として業界の熱意と市の協力を昇華させて益々高質度のコンペにしていっていただきたいものである。

工芸都市高岡'88クラフトコンペ審査委員長

清水九兵衛

'89 TAKAOKA CRAFTS EXHIBITION

1989 · 10/6 FRI - 10/10 TUE

